メニー・グレイの帰還
——18 世紀インドにおけるイギリス人女性像に向けて

難波　美和子（熊本県立大学准教授）

1

現在、調査を進めている問題について、まだ論旨を明確にするにいたっていないが、途中報告をすることにした。18 世紀から 19 世紀のイギリスで「インド帰り」ということばや経験が、文学テキストや政治テキスト、あるいは私的な情報ネットワークの中でどのように意味を変化させていったのかを調べようとしている。とくに女性の場合、「インド帰り」は意味として成立していたのかどうかから、検討する必要があるのではないかと思う。

表題のメニー・グレイ(Menie Grey)はウォルター・スコット(Walter Scott)の「外科医の娘(*The Surgeon's Daughter*)」のヒロインである。この物語は 18 世紀後半を舞台とする。スコットランドの田舎町ミドルマス(Middlemas)の外科医ギデオン・グレイ（Gideon Grey）の一人娘メニーは、東インド会社が勢力を拡張しつつあるインドへ渡り、思いがけないことから莫大な資産を得て帰国することになる。舞台となった 1770 年代には、インドから大金を持ち帰るイギリス人（男性）はしばしば、羨望と非難と嘲笑の対象となった。しかし、やがて彼らは体制内にジェントルマンとしての立場を確保し、インドはイギリス本国での厄介者に名誉と財産を獲得する場所へと変貌した。これによって 1790 年代後半にはインド帰りの成金への非難や嘲笑が消滅するとされる。「外科医の娘」はこの変化の後に書かれた。ウォルター・スコットがインドを主要な舞台として描いた作品は「外科医の娘」のみであるが、スコットの周囲にはインドと関わりを持った人物が相当数いた[1]から、むしろインドが小説のモティーフとしては抑圧されたことが疑問とされるべきかもしれない。急速に変化した「インド帰り」のイメージで問題とされてきたのは主に男性なので、こうした変化を背景とし、インドのイギリス人社会における女性たちについての歴史資料を視野におさめながら、イギリス社会の中での「インド帰りの女性」のイメージを検討することを研究の目標とする。これは 18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリス文学の中で「インド」という記号が機能した重みを明らかにすることにもなるだろう。それにはまず「インド帰り」の男性との問題の共通性と差異を検討しなければならない。フィクションにおける具体例として、「外科医の娘」のメニー・グレイがその手がかりとなるだろう。

「外科医の娘」は、スコットの友人トレイン（Train）が語った話[2]を基にして構想され、1827 年に『キャノンゲート年代記(*Chronicles of the Canongate*)』の第三部として発表された。それぞれ聞き手または語り手としてクロフタンガリー（Croftangary）が共通する枠構造を持つ。しかし「外科医の娘」はその後、「多くの読者の興味を引かない」[3]という理由で、「ウェイバリー全集(*Waverley Novels*)」の編纂に際して第 1 部「ハイランドの寡婦(Highland

Widow)」、第2部「二人の牛追い(Two Drovers)」とは分離されてしまう。2000年にエディンバラ大学から出版された詳細な註解付きの『ウェイバリー全集』は元の構想の形を取り、これが2003年ペンギンからペーパーバックとなることで入手が容易になった。

かつて私は「外科医の娘」についての小論を「19世紀イギリス小説におけるインド表象」として発表したことがある[4]。その2年ほど前から「イギリスにおけるインド表象の変化」を新しい研究テーマとして進めており、これが文学テキストを扱った最初の論文だった。実際のインドの交易関係が、イギリス文学のインド表象にどのような影響を与えたかを検討するために、インドがいつどのように、イギリスのフィクションに登場したのかを調べようとしていた。そこで、「最初のアングロ・インディアン小説の一つ」としてスコットの「外科医の娘」という記述[5]に出会ったのである。残念ながらスコットとインドとのかかわりについては、わからないことが多かった。スコットのオリエンタリズムには徐々に関心が集まっていた時期だったが、先行研究の有無も、まだ明らかではなかった。当時の検索環境は、現在ほど充実していなかったことはいうまでもない。結局のところ、この小論はきわめて不十分なものとなった。しかし「外科医の娘」が私にとって、もう一度検討すべきテキストであるのは、そのためだけではない。18世紀後半から19世紀初めのインドとイギリスの関係についての研究は資料の掘り起こしや、新しい視点による資料解析によって、この10年余りの間に急速に進展している。特にインド人女性とイギリス人男性の関係や、インドのイギリス人社会の中でのイギリス人女性の生き方などに新しい光が当てられてきている。そのような観点から言って、「外科医の娘」は議論すべき数多くの問題を内包していると考えられる。その一つが、「インド帰りの女性」としてのメニー・グレイのイメージである。

私はメニー・グレイをヒロインと呼んだが、いささか不適当かもしれない。タイトルが「メニー・グレイ」ではなく、「外科医の娘」であるように、彼女は主体的な存在ではない。メニーは物語を動かす主人公ではなく、脇役なのである。語られ、見られる存在であり、積極的な行動をとることはなく、他人からの働きかけに反応する人物である。主要な二人（最終的には三人）の男性にとってのヒロインという役割が、彼女にタイトル・ロールを与えているといえる。物語を動かすメイン・キャラクターは、メニーの幼馴染であるリチャード・ミドルマス(Richard Middllemas)である。彼は捨て子として、両親とイギリス社会への屈折した感情を持ち、そこから発する行動が物語を動かす。リチャードの性格設定によって、物語はトレインによって語られた寓話から離れ、人間のドラマとなったといえる。それでもメニーは原型モティーフの「絵に書かれた美女」[6]でありつづけ、メランコリーを湛えた姿で物語の聞き手＝記録者クロフタンガリーの前に立ち現れる。

2

物語は、ケイティ・フェアスクライブ(Katie Fairscribe)によってメニー・グレイの肖像画

の下で語られる。メニー・グレイはケイティの父方の遠縁で、一家に少なくとも5000ポンドを残したが、おそらくその4倍の遺産があったという。だが、フェアスクライブはメニー・グレイを「気の毒ないとこ(poor cousin)」と呼ぶ。いったいこの金がどのようにして彼女のものとなったのか、「それについての噂が、気の毒なメニーを隠棲させた(p.156)」からだ。

メニー・グレイは、リチャード・ミドルマスが誕生してグレイ家に遺棄された4年後に生まれた。生後すぐに母を失い、父親と子守の手でリチャードと一緒に育てられた。二人の間にはごく自然な恋愛に近いものが育っていたが、成人したリチャードは冒険心を友人にそそのかされてインドへ向かうことになる。メニーは彼を引きとめようとはせず、帰ってくる約束も求めず、リチャードを送り出す。だが、数年後、東インド会社軍を脱走し、マイソールのナワーブ（Nawab）[7]、ハイダル・アリ（Hyder Ali）に仕えているリチャードに呼ばれると、彼女はインドへ赴いた。だが、リチャードは彼女をハイダル・アリの息子ティプー・スルタンに差し出すために呼び寄せたことが分かる。更にリチャードはハイダル・アリを裏切ろうとしたことが露見し、処刑されてしまう。ハイダル・アリはメニーへの慰謝料として金貨1万枚を与えて去らせた。

こうしてメニーは思いがけず大金を手にして帰国する。メニー・グレイは故郷に帰り、結婚せず、財産を善行に使うことを喜びとして残りの生涯を送った、と語られる。親しかった少数の人々の間では、メニーは親切で私心のない穏やかな人柄として記憶され、多くの人々にとっては古代ローマの貴婦人のように思われた(pp.285-286)。

フェアスクライブ氏がクロフタンガリーに「もうこの話をしても、傷つく人はいない」というとおり、リチャード・ミドルマスの周囲には性的逸脱や裏切りといった「不名誉」が存在するが、語りの現在においては、縁に連なる人間は誰もいない。だがそれよりも、メニー・グレイの突然の莫大な財産の獲得こそがスキャンダルであったのだ。メニー・グレイの帰還は、ネイボッブと呼ばれるインド成金の胡散臭い大金を持った帰国と外形的に相同である。しかしメニーは物語の中で非難される点を持たない数少ない人物である。ネイボッブとしてのメニーが手にしたのは無垢の金であって、それが遺産である。フェアスクライブ氏が、クロフタンガリーに聞かせようとする話の焦点がそこにあるのであれば、リチャードの苦悩や、アダムとの葛藤には意味がたいしてないとさえいえる。メニーが金を手に入れたという話を、フェアスクライブ氏は、それを娘のケイティに語らせる。つまり、これは彼の一族の伝承なのだ。この金の問題でメニー・グレイが隠遁を余儀なくされただけではなく、その遺産を受け取ったフェアスクライブ家も、その金の由来の正当性を語らねばならない、という立場に立たされている。

帰国したメニー・グレイが直面した噂(whisper)はどのようなものだったと考えられるだろうか。物語の舞台がインドに移動するのが1770年ごろと考えられるので、メニー・グレイの帰国はおよそ1770年代半ばと想定できる。時あたかもサミュエル・フットの『ネイボッブ』の舞台をきっかけに、「インド帰りの成り金」を意味する語としての「ネイボッブ」

が一般化し、強欲な略奪者として非難が強まった時代である。1785年に始まるヘイスティングズ裁判を経て、インド支配が正当化されるとともに、インド成り金としてのネイボッブに批判的意味が薄れ、インドでの富の獲得に不当な行為があるはずがないという認識に転換が生ずる。ヘイスティングズ以上の蓄財を行った後任者は非難されるどころか賞賛された。かつて拙論で指摘したことだが、「外科医の娘」には、二つのタイプのネイボッブが登場しており、トム・ヒラリー(Tom Hillary)を通じて、芳しからぬ金もうけを示唆している。その一方で上位にあるウィザリントン（リチャードの父親）は、蓄財が批判の対象とはなっていならず、むしろ軍事的功績に対する正当な褒賞とみなされている。すなわち、かつて「インド成り金」であることによって自動的に強欲な略奪者と想定されたのに対し、インドでの蓄財の意味の転換後は、莫大な金が正当な褒賞という文脈になる。だからこそ、ジェントルマンが目指すことが可能な職業となる。メニー・グレイは正当性を担保するために、金をジェントルマン階級にふさわしい「正しい」使い方をしなければならない。その上、新しい身分にふさわしい態度を取らねばならない。それによって彼女は尊大な「ローマの貴婦人」となり、その姿は良きネイボッブ像と二重写しになる。

メニー・グレイの財産獲得がスキャンダルであり、彼女の後継者はそれが彼女が受けた苦難に対する正当な補償として公明正大なものであると、主張せねばならないという文脈は、メニーが女性であることから派生する。物語の上でメニーと相補関係にあるモントレヴィル夫人は、女性性が否定される一方で、「シバの女王」「ベガム（Begum）」といったオリエントの女性の尊称をイギリス側から与えられ、インドにおける権勢の保証をハイダル・アリから与えられ、「極めて親しい」と噂されることによって、彼との性的な関係をあげつらわれる。ことさらにモントレヴィル夫人のハイダル・アリとの関係性を強調することは、フェアスクライブ家の語りが、メニーの純潔性を保証することになる。

『キャノンゲート年代記』の最後で、女性のネイボッブの遺産によるフェアスクライブ家の形成が語られるのは、インドが1745年の反乱以後のスコットランドにおいて問題解決の場であったことを暗黙のうちに示しているのではないだろうか。1760年代ごろからスコットランド諸連隊の植民地への派遣が本格化し、その周辺にスコットランド人の大英帝国建設への参加が派生していく。スコットランドで生活がなりたたない各階級からの脱落者が、インドを代表とする植民地へ向かうのだ。『年代記』における「外科医の娘」の位置づけは、1745年の反乱後のスコットランドの疲弊からの再建が大英帝国による世界システムの構築において実現したことを象徴するかのようだ。メニー・グレイという女性を介して持ち帰られたインドの富は『キャノンゲート年代記』の枠物語の中では厄介な怪物であるとともに、フェアスクライブ家を反乱後の転落から救うものであったのだ。

3

メニー・グレイのインドの富が、彼女の周辺に恩恵をもたらしたとしても、彼女は隠遁

を余儀なくされたと語られることに注意しなければならい。彼女へ向けられた視線は、インドの胡散臭い金を持って帰ったという点だけではなく、インドへ行って、ひとりで帰ってきた女性ということにもあるのではないかと考えられるからだ。悪名高きネイボッブたちは、非難されたり嘲笑されても、体制内に自分の場所を確保する（＝議席を得る、貴族と縁戚になる）といった次のステップがあったが、結婚を放棄したメニーには隠遁するほかはない。

18 世紀半ばから後半にかけてのインドのイギリス人社会での女性たちの生活はまだ十分に解明されているとはいえないが、歴史研究の成果から推測される、「インド帰り」の女性のイメージはあまり芳しいものにならないようだ [8]。イギリス東インド会社はインドで暮らす社員が放蕩にふけらないよう、結婚することが望ましいとしていた。その一方で、社員が「現地の女性」と正式に結婚することは奨励されなかった。そこで 18 世紀中ばまでには、インド各地に点在する小さなイギリス人社会でさまざまな「女性問題」が起こっていた。そのひとつは、イギリス人の東インド会社員が結婚するのに適当な独身のイギリス人女性の数が不足していることである。イギリス人の女性たちは本国で社員と結婚してインドに来るか、社員の姉妹などが兄弟の紹介で結婚するためにやってくるというという例が多く、従って、イギリス人女性はいずれにせよ間もなく結婚した。つぎに、社員はイギリス人社会の中では上層に属するので、結婚して地位にふさわしい生活をするには相当の収入が必要で、薄給の若い社員は面目を保つような結婚できなかったという。兵士の家族は更に貧しく、兵士や下士官の妻たちは士官の家で下働きをする必要があった。ときには売春もともなった。このような条件であったから、インドへ向かう女性は貧しいかなんらかの不都合があるとみなされるおそれがあった。そのような状況では、イギリス人社会のなかで女性たちはさらに小さな社会を構成することになったに違いない。18 世紀末にカルカッタで短期間を過ごしたエリザベス・フェイ(Elizabeth Fay)の手紙 [9] からも、イギリス人社会の閉鎖的な人間関係が窺える。胡散臭い女性がいたというわけではなく、夫の地位に基づく上下関係と女性同士の仲間意識でグループが構成されていることで人間関係が厄介なものになったようだ。

一方で多くのイギリス人男性は「現地の女性」と非公式だが安定した関係を持った。生まれた子どもたちはユーラシアン（Eurasian）と呼ばれ、非嫡出子(illegitimate)だが、父親が豊かであれば財産を遺贈された。娘の場合は、イギリス人と結婚することが多かったという。これらの記述から推測できるのは、上層部に属する女性たちだけであるが、彼女たちは結婚がインドに暮らす動機になっている。帰国は、夫の帰国か、夫の死が理由となる。子どもを連れて先に帰国するということも考えられた。

ネイボッブと呼ばれたインド成り金の場合は、クライヴやヘイスティングズのように早い時期に同僚の親族と結婚する例もあるし、帰国まで正式な結婚をしない例もある。帰国後、財産を背景に上流階級の若い女性と結婚することなどが、ネイボッブに対する反感を呼んだことは、フットの『ネイボッブ』からも窺えよう。女性がインドから帰るときに財

産を持っているのは、夫が蓄財したことによるはずで、夫もなく未亡人でもなく、遺贈してくれる親族もなく、財産を手に入れることは想定できない事態でありスキャンダルといえるだろう。

メニー・グレイが恋人であるリチャード・ミドルマスに呼ばれてインドへ向かうことは、異常なことではなかったと思われるが、結婚することなく帰国したことは疑念を呼ぶかもしれないことだった。「彼女がアダム・ハートリーと結婚するのが、当然であろうけれども」結婚しなかったのは、彼女の心情による。リチャードに裏切られた上で死なれた彼女には、どのような相手であれ、結婚という選択肢は残っていなかった。アダムと結婚しないならば、彼女はインドに留まっていることはできなかっただろう。しかし、「外科医の娘」には、夫のいない女性がもう一人登場する。モントレヴィル夫人は夫の死後もインドに留まり、自分自身の勢力を築いている独立した女性だ。そのためにイギリス人たちからはアマゾン(Amazon)とか女らしくない（unsexed）と呼ばれ、怪物化したイメージが与えられている。とはいえ、メニーも結果的に望ましいあり方から逸脱していく可能性はあった。メニーに与えられる金がもともとモントレヴィル夫人のものだったことから、二人が相補的関係にあると認められるだろう。この自立した女性は秩序破壊者として排除され、メニーによってその金がスコットランドへもたらされる。こうした自立的な女性は排除され、モントレヴィル夫人はメニーのような好ましい女性に置き換えられる。実際には彼女ほどではないとしても、すでに 18 世紀末にインドで自主的な活動を試みた女性たちが存在したことは確かなようだ。上述したエリザ(ベス)・フェイはその一人である。初め夫に従ってインドに行くがやがて別居し、カルカッタのイギリス人社会で自立し始めた。彼女は一度イギリスに戻った後、再びインドに戻り、商売を始める。フェイは第二次マイソール戦争の際、カリカットでハイダル・アリ勢力の捕虜となり、8 週間にわたって不自由な生活を余儀なくされた経験を持っている。にもかかわらずインドへ戻ることを決意するには、それだけの動機があったと考えられる。それが効率の良い商売であれ、人間関係であれ、彼女の経験は東インド会社社員や兵士たち男性の経験とは異なった要素を持つだろう。

現在はまだ、メニー・グレイのネイボッブ的な表象と、エリザ・フェイの経験の表現との連続性を検証しようとしている状況である。このような女性たちの経験の言説を探し出し、文学テキストに表象された「インド帰りの女性」や、公の記録からは隠された女性たちの姿を描き出したいと考えている。

テキスト

Scott, Walter, (note by Claire Lamont) *Chronicles of the Canongate*, (1827, Penguin Classics, London, 2003)

注

1　親族に限っても、叔父ジェームズ・ラッセル(James Russel)とその息子たち、兄ロバート、息子チャールズ、甥の一人ウォルター、義理の兄弟、などが、東インド会社やインド派遣部隊の一員として、インドに行っている。Claire Lamont, Historical Note to 'The Surgeon's Daughter' (in *Chronicles of the Canongate*, Penguin, 2003), p.360.を参照。

2　スコットは序文でトレインへの謝辞を述べている。C.ラモントの註解を参照すると、インドを舞台にしている事のほかにも、重要なプロットがトレインの話を基にしていることがわかる。スコットはこれに歴史的な背景を与えてハイダル・アリやティプー・スルタンを登場させた。さらにリチャード・ミドルマスの人物像によって物語をドラマティックなものにした。

3　*The Waverly Novels, Vol.7: The Surgeon's Daughter and Castle Dangerous*, (London and Edinburh, 1904), に序文として引用された1831年のスコットのことば。

4　拙論「19 世紀イギリス小説におけるインド表象――ウォルター・スコット『外科医の娘』の場合――」(『現代文化論集　第42号』、筑波大学現代語・現代文化学系紀要、1996年2月.(pp.167-183)

5　Belliappa, K.C., *The Image of India in English Fiction*, (New Delhi, 1991), p.11.

6　トレインの話の基には、フォークロアがあると思われる。原形となった話は、「恋人の絵姿を持って旅に出た若者が、その絵に恋をした主人に恋人を差し出す」というものだが、グリムによって知られる「白い花嫁と黒い花嫁」(AT403) の始まりの「兄が美しい妹の絵姿を持って、ある国の王に仕える。王はその絵の美女に恋をし、花嫁として連れてくるように美女の兄に命ずる」というモティーフの変奏ともみなせる。リチャードとメニーは「兄妹のようにして育った孤児の若者と娘」である。

7　ナワーブ (nawab) はインドのムガール帝国(1526-1858)における地方の行政長官。皇帝の権威の低下とともに自立した。ハイダル・アリ(1722 - 82)はインド南部のマイソール王国の傭兵隊長から支配者となり、ムガール皇帝からナワーブとして承認された人物。コロマンデル地方をめぐってイギリス東インド会社と衝突した。'nawab'が英語転訛したものが'nabob'であるが、スコットはハイダル・アリを指す際に'nawab'のみを用いている。

8　Hawes, Christopher, *Poor Relations: The Making of a Eurasian Community in British India 1778-1833*, (Curzon, London, 1996), Ghosh, Durba, *Sex and the Family in Colonial India: The Making of Empire*, (Cambridge University Press, Cambridge, 2006)

9　Fay, Eliza, (E.M. Forster, ed.), *Original Letters from India*, (London, 1817, Hogarth, London, 1925)